

国語

注 意

- 1 問題は **1** から **5** まで、16 ページにわたって印刷してあります。
また、解答用紙は両面に印刷してあります。
- 2 検査時間は五〇分で、終わりは午前九時五〇分です。
- 3 声を出して読んではいけません。
- 4 答えは全て解答用紙にHB又はBの鉛筆（シャープペンシルも可）を使って明確に記入し、
解答用紙だけを提出しなさい。
- 5 答えは特別の指示のあるもののほかは、各問のア・イ・ウ・エのうちから、最も適切なものを
それぞれ一つずつ選んで、その記号を書きなさい。また、答えに字数制限がある場合には、や
。や「などもそれぞれ一字と数えなさい。
- 6 答えは解答用紙の決められた欄からはみ出さないように書きなさい。
- 7 答えを直すときは、きれいに消してから、消しくずを残さないようにして、新しい答えを書き
なさい。
- 8 受検番号を解答用紙の決められた欄に書き、その数字の○の中を正確に塗りつぶしなさい。
- 9 解答用紙は、汚したり、折り曲げたりしてはいけません。

1

次の各文の——を付けた漢字の読みがなを書け。

- (1) この方法ではうまくいかない虞がある。
- (2) この建物は平成二年の定礎だ。
- (3) 彼は三十キログラムほどの斤量の米をかついだ。
- (4) 柔和な顔の銅像を鑑賞する。
- (5) 味一辺倒ではなく、見た目にもこだわった料理を提供する。

2

次の各文の——を付けたかたかなの部分に当たる漢字を楷書で書け。

- (1) 長い下積みした後、ついに作家としてトウカクを現した。
- (2) 面白そうな新刊が書店に並んでいるのを見てショクシが動く。
- (3) 音楽の授業で童謡のリンショウをする。
- (4) 校長先生のクンワを聞く。
- (5) 恩師の教えを、キンカギョクジョウとして守り続けている。

3

次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。(＊印の付いている言葉には、本文のあとに〔注〕がある。)

高校時代にスポーツクライミング全国大会に出場した筑波岳は、大学入学後、三年の国方晃からクライミング部に、三年の梓川穂高から登山部に入部するよう勧誘を受けていた。岳は両者の勧誘を固辞していたが、穂高は一度筑波山に登ったら、登山部への勧誘を諦めるといふ。穂高の勧誘から逃れるため、岳は登山に行くことにした。

草木が生い茂る細い道を、他の登山客の背中を追いかける形で進む。数十メートルで鬱蒼とした山道に入った。頭上を木々が覆い、足下では金色の粉が飛び散ったように木漏れ日が躍っている。

初心者向けの山と言っても、登山道がアスファルトで綺麗に整備されているわけではなかった。昔ながらの石と土の階段を、笹に腕をくすぐられながら上った。

A 穂高がべらべらと話しかけてくるのかと思ったが、意外と静かに岳を先導する形で歩いていく。それはそれで、初登山の反応を背中越しに窺われているみたいだった。

微かに息が上がってきた。というより、体温が上がった。序盤からなかなかの急坂が続いていたから、喉を通り抜ける息が徐々に太くなる。

高校のクライミング部を引退したのは昨年の九月。半年以上、激しい運動はしてこなかった。体型は変わっていないはずなのに、意外と筋力や体力は衰えているみたいだ。

「ジョギングとかと一緒に、体が慣れてない最初の十分、十五分はちょっとしんどいんだよ。」

振り返らず、歩みも止めず、穂高が言う。息が上がっているのを見透かされ、「そうですか。」と短く返した。

「もうちょっとしたら楽になってペースが掴めるよ。」

彼の言う通りだった。十分ほど歩くと、何故か視界が開けた。ずっと見えていたはずの背の高い木々の輪郭が妙にはっきりして、色が濃くなって、遠くまで見渡せる。何という名前の鳥だろうか、野鳥の鳴き声まで鮮明に聞こえた。

「杉の木、あれがモミの木、あつちが多分、アカガシ。」

前を歩く穂高が振り返り、踊るような足取りで周囲の木々を指さす。ゆっくり説明してくれたのに、目で追いきれない。それほど視界の中の情報量が多い。

しばらく歩くと、登山道が分岐していた。「白雲橋コース」と書かれた看板に沿って、木の根と石が折り重なった急勾配を上って行く。

「なんか見えた。」

穂高が前方を指さす。大量の石がうずたかく積まれた東屋＊あずまやが開けた場所に建っていた。少し前を歩いている登山客のグループが写真を撮っている。「白蛇しろへび弁天」と看板があった。山になった石の上には小さな祠ほこらが二つ築かれている。

「ここで白蛇を見ると金運が上がるんだってさ。」

穂高が由緒書きの説明を読み上げてくれた。前にいた登山客は面白半分に白蛇の姿を探していたが、後ろから別のグループが登ってきたので、岳達たけたちは先へ進むことにした。

再び森の中に入るが、白蛇弁天を境に明らかに道が険しくなった。歩きやすかった階段は、ごろごろとした岩が転がる道に姿を変えた。足を取られまいと視線が下に集中し、息が苦しくなる。

これでは余計に疲れてしまう気がした。意識して顔を上げると、苔生した巨木の幹に沿って、狐色のキノコが点々と顔を出していた。その下に、まるで地中から火が噴き出したみたいなお赤なキノコも生えている。

息を合わせたように同じタイミングで、そのキノコを穂高も見ている。「これの名前はわかんないや。」

ははっと笑って、再び歩き出す。えらく楽しそうだ。普段、一人で登山するときもこんなのだろうか。もしくは、半ば無理矢理連れてきた後輩と一緒にいることが、そんなに愉快なのか。

不可解だった。たまたま飛んできた帽子を拾っただけの新生を、この人はどうしてこんなにも登山仲間にしたのだろうか。新入生なんてたくさんいて、その中には岳よりずっと登山に興味を持つ学生がいるはずなのに。

「なんで俺を登山部に誘うんですか。深い呼吸の合間に問いかけそうになる。聞いたら最後まで逃げられない気がして、慌てて飲み込んだ。」

「君はさ、どうしてスポーツクライミングをやったの。」

またもこちらの心を覗き見たみたいに、穂高が聞いてくる。あまりに唐突で、角張った岩に置いた右足のバランスを崩しそうになる。咄嗟とっさに近くにあった巨石に手をかけた。

爪先で岩の角を掴むように踏ん張り、体を前へ前へ進める。その感覚がスポーツクライミングに似ていて、思いがけず質問に答えてしまう。⁽²⁾「中学まではバスケをやってたんです。高校入って、物珍しくて始めました。」

「俺、あんまりスポーツに詳しくないんだけど、スポーツクライミングって、登るスピードを競うものなの？」

「ウォールツという人工の壁を、ホールドを手がかりに登るのがスポーツクライミングですけど、実はその中でも種目が三つに分かれてるんですよ。タイムを競うスピード。課題をいくつクリアできたかを競うボルダリング。どれだけ高く登れたかを競うリード。俺はリードが得意でしたね。」

話しながら岩の道を登ったせいか、どんどん息が上がってきた。胸の

奥が、針で刺されたみたいに痛んでくる。

だが、不思議と息苦しくはない。森の中だからだろうか。気温もバスを降りたときよりずっと涼しく、一度に体内に取り込める空気量が多い気がした。

「でもさ、登った高さを競うってことは、リードが三種目の中で一番危険なんじゃないの？」

「ちゃんと命綱をつけますよ。ウォールにはホールドと一緒に命綱を引っかけるポイントがついてて、登ってはロープを引っかけ、登っては引っかけを繰り返すんです。」

十メートル以上登って落ちても、ロープがきちんと確保支点と呼ばれるポイントに引っかかっているから、下まで真つ逆さまといふことはない。

「じゃあ、手を滑らせて落ちたら、ロープ一本で宙ぶり？ なかなかスリリングなスポーツだね。」

穂高が一際大きな岩を慎重に跨ぐ。体が上下するのに合わせて、彼の声の上擦る。

「日常生活では絶対に生身で登ることがない高さを這い上がる種目がリードです。筋力や柔軟性や持久力はもちろん大事ですけど、ホールドが作り出すルートは一種類じゃないんで、最短ルートや難易度の低いルートを選ぶ嗅覚とか視野の広さとか戦略とか、できるだけ少ないパワーで自分の体重を移動させたり持ち上げたりするテクニックとか、いろんなものが勝敗を分けるんです。」

ただ闇雲に上を目指して登るのではない。どのホールドをどちらの手で掴むか。どのホールドに足をかけるか。そこからどのホールドに手を伸ばすか。一瞬の判断が勝負を決める。

気持ちちはやってとてつもなく難易度の高いルートに入り込んでしまいい、体力を消費した挙げ句に手を滑らせて落下——なんて負け方を何

度ももしてきた。そのたび、クライミング部のコーチに「焦っちゃったな。」と肩を叩かれた。

「楽しそうに話すんだね。」

やっと岩場を抜けただろうかというところで、穂高が再び振り返った。

(3) にやりと、岳を煽るように微笑む。

正直、面食らった。

F 「気づいてなかったの？」

「……そんなつもりはないんですけど。」

「そう？ 国方の勧誘を頑なに断ってるのが嘘みたいに饒舌に話すなあ、って思いながら聞いてただけだよ。」

「穂高先輩がいろいろ聞いてくるからでしょう。」

「穂高先輩じゃなくて穂高さんでいいのに。」

「穂高先輩がいろいろ聞いてくるからです。」

ムキになっているのが自分でもわかる。(4) 「そうかなあ。」と笑いながら首を傾げる穂高に、違うとたまたま掛けたくなる。

けれど、言葉を重ねれば重ねるほど、きっと穂高の指摘を肯定してしまいうことになるのだ。

G うるさい、もう辞めたんだからいいだろ。胸の奥で勝手に過去を懐かしんでしまう自分を非難しながら、岳は両足を動かした。

山の中は静かだ。前後を歩く登山客の話し声や足音、衣擦れの音、木々の枝葉が風に蠢く音や野鳥の声はもちろんするが、すべてが自分から少し離れたところにあつて、岳の思考や感情を侵食してこない。穂高が話しかけてこない限り、岳は独りになれた。心地のいい、とても透明感のある孤独だった。

岩肌を足先で踏みしめ、急坂を登る。足の動きに合わせて岳の頭や胸の中が掻き回される。記憶や自問自答の渦で最初こそ混沌としているのに、(5) いつの間にか整理され、淀みが取れ、澄んでいく。

それは、腹の底から湧き水のように勝手に流れ出る筑波岳の心根と、対峙するということでもあった。

(額賀藩「風は山から吹いている」による)

〔注〕東屋——屋根と柱だけの建物。

たまたま飛んできた帽子——国方から勧誘を受けているときに

飛んできた帽子を届けたことがきっかけで、岳は梓川穂高と知り合う。

ホールド——スポーツクライミングの用語で人工の壁に取り付けてある突起物。

〔問1〕⁽¹⁾ 十分ほど歩くと、何故か視界が開けた。とあるが、この表現から読み取れる岳の様子として最も適切なものは、次のうちではどれか。

ア 山に登り始めて標高が高くなってきたからか、見晴らしのよい景色のすばらしさに改めて気が付いた様子。

イ 次第に穂高との会話のやりとりが生まれはじめたからか、彼の言う通りに周囲のものを目に向け始めようとする様子。

ウ 初登山への緊張がほぐれてきたのか、穂高の指摘する木や鳥の鳴き声を探そうとするゆとりが出てきた様子。

エ 身体が山に登ることに慣れてきたのか、周囲のものに意識を向けられるくらいに気持ちの余裕が生まれてきた様子。

〔問2〕⁽²⁾ 思いがけず質問に答えてしまうとあるが、それはなぜか。その説明として最も適切なものは、次のうちではどれか。

ア 登山部に入るまいと意地でも穂高を無視していた岳だが、以前のめり込んだスポーツクライミングについての話を穂高がしてきたことで、穂高に対する岳の関心が高まってきたから。

イ 穂高からスポーツクライミングについて聞かれたことに加え、高校のときのスポーツクライミングの感覚と登山の感覚が重なったことで、頑なになっていた岳の気持ちが不意に緩んだから。

ウ 岳は穂高に対して登山部に熱心に誘う理由を問うことができないという不満を感じていたが、登山の楽しさに気付かされたことで誠実に穂高に向き合いたいと感じるようになったから。

エ 岳は登山部の穂高がスポーツクライミングに興味をもったことに驚きを感じたが、登山をすることで徐々に思い出したスポーツクライミングの楽しさを穂高と共有したくなったから。

〔問3〕⁽³⁾にやりと、岳を煽^{あお}るように微笑^{ほほえ}む。とあるが、この表現から読

み取れる穂高の様子として最も適切なものは、次のうちではどれか。

ア スポーツクライミングを話題にすることで、ようやく岳の心を開かせて話することができそうだと手応えを感じ、岳の言葉をさらに引き出そうとする様子。

イ 岳がスポーツクライミングの話をする様子について言及することで、これまで岳に相手にしてもらえずに、つらく思っていた気持ちを発散させようとする様子。

ウ スポーツクライミングの話を懸命にする岳を見たことで、スポーツクライミングだけではなく、登山の魅力にも早く気が付いてほしいとじれったく思っている様子。

エ スポーツクライミングの話題から岳の話を引き出したことで、距離が縮まったと思い、より岳の懐^{ふところ}に飛び込むためにあえて岳の言葉を詰まらせようとする様子。

〔問4〕⁽⁴⁾「そうかなあ。」と笑いながら首を傾^{かし}げる穂高に、違^{ちが}うとたたみ

掛けなくなる。とあるが、この表現から読み取れる岳の気持ちとして最も適切なものは、次のうちではどれか。

ア 穂高の質問に対して丁寧に答えてきたにもかかわらず、それを誤って認識してしまったことが残念で、不快に思う気持ち。

イ スポーツクライミングについて二の句が継げないほど穂高に一方的に語ったことを申し訳なく思い、その場を取り繕おうと必死な気持ち。

ウ 穂高の言葉を否定することで、遠ざけようとしていたスポーツクライミングへの思いがふいに露呈^{ろてい}したことを認めたくない気持ち。

エ 穂高の言葉を否定しようとしているにもかかわらず、自分の意図が伝わらないことに失望し、どのように理解させるべきか迷う気持ち。

〔問5〕 いつの間にか整理され、淀^{よど}みが取れ、澄^すんでいくとあるが、この表現から読み取れる岳の様子として最も適切なものは、次のうちではどれか。

ア 全ての音が自身と適度な距離がある山の静けさの中で山を登るという身体的な運動を行ううちに、自然と考えが整い、自分の心の奥底にある本心と向き合っている様子。

イ 自身を優しく包み込む山の静寂の中で心地よい孤独を感じながら、一定のリズムで山を登り続けるうちに、自分の無意識の部分を進んで理解しはじめようとしている様子。

ウ 他者の存在を感じられる程度の音のみが聞こえる山の静けさと、山を登るというリズムのある身体的動作を感じているうちに、自分の考えや本心を受け入れようとする様子。

エ 自分は一人ではないが誰も干渉することもないという心地よさのある山の静けさの中で黙々と山を登るうちに、心が自然と洗われていき、本当の自分を認識しようと思える様子。

〔問6〕 本文に用いられている表現について説明したものとして最も適切なものは、次のうちではどれか。

ア 穂高^Aがべらべらと話しかけてくるのか、ごろごろとした岩が転がる道^Cというような、状況や情景についての詳しい描写によって、登場人物の心情が具体的に表現されている。

イ 「杉^Bの木、あれがモミの木、あつちは多分、アカガシ。」というように、樹木の名の一部をカタカナで表記することにより、穂高がその樹木の名前に対して自信をもてないことが表現されている。

ウ ^D「なんで俺を登山部に誘うんですか。」^G「うるさい、もう辞めたんだからいいだろ。」など、カギ括弧を用いずに岳の心情を表した部分は、岳の視点に寄り添いながら物語が語られていることが表現されている。

エ ^E「体力を消費した挙げ句に手を滑らせて落下——」^F「……そんなつもりはないんですけど。」というように、「——」「……」という記号の使用により、視覚的に会話の間が表現されている。

次のA、Bの文章を読んで、あとの各問に答えよ。（*印の付いている言葉には、本文のあとに〔注〕がある。）

A

文化を談ずる声は、ジャアナリズムに充滿しているが、文化というのは、もう過去のものとなり、歴史の裡に編入されないと、その形がはっきりしないのだから不思議である。私達は、文化の抜け殻しか、はっきり意識出来ない。これは、文化という言葉が流行しようとしまいと変りない事実らしい。現代文化という言葉は、直ぐ捕えられるが、刻々に変り育ち、歴史の上に深くその痕跡を刻するに至らない現代文化の実態の方は、炯眼な批評家にも、深く隠れたものであろう。芸術という定義難しいものも亦同じである。⁽¹⁾現代人が現代芸術を、正しく批評したり評価したりする事は、実に難かしい、殆ど不可能な業である。仕方がないから、私達は、めいめいに言いきかせている、——例えば、私が自らを批評し、評価し、そして、もし誤らなければ、私に何が創り出せよう、と。

*前大戦の頃、フランスの文化が非常に混乱して、新聞や雑誌で、将来の文化とか芸術とかが、どうなるかという問題が、盛んに論じられた時、或る雑誌記者が、ベルグソンを訪ねて、これからの文学はどうなるかについて意見を求めた。自分には皆目わからない、とベルグソンは言った。記者は、重ねて、少くとも、可能な或る方向というものは考えられるだろう、貴君も考え事では専門家である、細部の予見は不可能でも、全体的な見通しぐらいは、持っているだろう、例えば、明日の優れた演劇として、どういう演劇を考えているか、と訊ねると、ベルグソンは、それがわかっていれば、自分で書くだろう、と答えた。この話は、ベルグソン自身が、後年のエッセイの中に書いている話で、そう答えた時の、

記者のあきれ返った様な顔附きが未だ忘れられないと書いている。ベルグソンの考えによれば、世人は可能という事について根本から誤った考えを持っていて、それが為に、可能性という言葉を濫用する事になると言う。戸を閉めていれば、誰も這入って来られない。だからと言って、戸を開ければ、誰が這入って来るか予言出来るとは言えない。併し、世人は可能性について、そんなでたらめばかり言っているのである。或る物が実現する為に、越え難い障碍はなかった、という意味なら、その或る物は、実現する以前に、実現可能だったと言える。わかり切った事だ。実現の不可能ではないものは実現可能と呼ぶべきではないか。つまり、実現が不可能ではないという事が、実現の為の条件なのだから、この場合、可能という言葉は、空しい言葉ではない。ところが、世人は、そういうのはつきりした消極的な意味での可能という言葉に、知らず識らずのうちに、積極的な意味を持たせて了うのである。障碍の欠除を意味する可能性なら、確かに、それは現実性に先立つが、例えば、シエクスピアのハムレットは、書かれる前は、観念の形で、可能性としてあったと言うなら馬鹿々々しい事になるだろう。シエクスピアのハムレットが、或る精神の裡に可能性の形で自ら現れ、それが、現実のハムレットを創り出す、と言う事は、定義上、その精神とはシエクスピア自身に他ならぬではないか。シエクスピアの先駆者が、感ずるところを、考える処を、ことごとく、シエクスピアは、やがて感じ考えるであろう、などと言わなくても、シエクスピアという男が生れたとだけ言って置けば、すむ事である。

可能性とは、過去に映った現在の幻影である。現実のものが次々に新しく現れて来るにつれて、その映像を、人々は任意の過去のうちに常に映し出してみる。だからこそ現実は、常に可能であったという事になる。私達は明日はやがて今日になる事を知っているし、可能性の幻影は、休みなく現れているから、明日になれば過去になる現在のうちに、明日の

姿は、はつきりと掴み難いにせよ、既に含まれている、などと暢気な事を言っている。⁽²⁾鏡の前に立った人が、鏡の中の自分の姿を見て、鏡のうしろに行けば、あの姿に触れると考えている様なものである。物質界の閉ざされたシステムのうちでは、予見は可能だ。という事は、可能性という言葉の濫用が不可能だという事と同じ意味だ。併し、人生に於ては、まず新しい事態が生じたからこそ、事態は可能であったであろうと考えられる。事態が、可能であったものになり始めるまさにその瞬間に、事態はいつも可能であったのだ。可能性は決して現実に行き出さぬ。一つたん現実が現れれば、現実には恐らく先行したであろうと言えるだけのものに過ぎぬ。ひと昔前には、明日の文学はどうなるかという議論が盛んだった。今日では、文学という言葉が文化という言葉に変わったが、可能性という言葉の濫用には、一向変りはない様である。論者は、知らず識らずのうちに易しい道を選ぶ。ベルグソン流に考えれば、可能性となる現実の文化を感じず、現実の文化となる可能性を知性の眼で追うのである。そして、論者は、いろいろと論じた揚句、日本の新しい独自の文化の誕生が望ましいと言う立派な結論に達したりしているが、実は、そういうものこそ、論者の一番考えない、殆ど恐れているものではないかとさえ思われる。何故かという、新しく生れて来る文化は、生れて来る人間の様に、独自の性質のものであるより他はないし、独自の文化は、人間の様に生れて来るより他はないのであるが、論者の好むところは、文化の誕生より、寧ろ文化的プログラムの実現、文化的予定計画の達成と呼ぶべきものであろうし、新しい独自の文化というものも言葉の綾に過ぎず、実は、文化の新旧も、独自の文化も、模倣の文化も、一般に文化というものを構成している要素の組合せ如何によって現れると考えるのが、論者の理想であらうから。

(小林秀雄「感想」による)

⁽³⁾B
社会心理学が専門の山岸俊男は、信頼と安心はまったく別のものだと論じています。どちらも似た言葉のように思えますが、ある一点において、ふたつはまったく逆のベクトルを向いているのです。

その一点とは「不確実性」に開かれているか、閉じているか。山岸は『安心社会から信頼社会へ』のなかで、その違いをこんなふうに語っています。

信頼は、社会的な不確実性が存在しているにもかかわらず、相手の(自分に対する感情までも含めた意味での)人間性のゆえに、相手に対してひどい行動はとらないだろうと考えることです。これに対して安心は、そもそもそのような社会的な不確実性が存在していないと感じることを意味します。

安心は、相手が想定外の行動をとる可能性を意識していない状態です。要するに、相手の行動が自分のコントロール下に置かれていると感じている。

それに対して、信頼とは、相手が想定外の行動をとるかもしれないこと、それによって自分が不利益を被るかもしれないことを前提としています。つまり「社会的な不確実性」が存在する。にもかかわらず、それでもなお、相手はひどい行動をとらないだろうと信じること。これが信頼です。

つまり信頼するとき、人は相手の自律性を尊重し、支配するのではなくくゆだねているのです。これがないと、ついつい自分の価値観を押しつけてしまい、結果的に相手のためにならない、というすれ違いが起こる。相手の力を信じることは、利他にとって絶対的に必要なことです。

私が出産直後に数字ばかり気にしてしまい、うまく授乳できなかった

のも、赤ん坊の力を信じられていなかったからです。

もちろん、安心の追求は重要です。問題は、安心の追求には終わりが
ないことです。一〇〇%の安心はありません。

信頼はリスクを意識しているのに大丈夫だと思ふ点で、不合理な感情
だと思われるかもしれませんが、しかし、この安心の終わりのなさを考
えるならば、むしろ、「ここから先は人を信じよう」という判断をしたほ
うが、合理的であるということが出来ます。

(伊藤亜紗「うつつ」的利他——ケアの現場から」による)

〔注〕 炯眼——ものごとの本質を見抜いたり将来を見通したりする力
が優れている様。

前大戦——ここでは、第一次世界大戦をさしている。

ベルグソン——フランスの哲学者。

シェクスピア——イギリスの劇作家、詩人。

ハムレット——シェクスピアの戯曲。

ベクトル——物事の向かう方向と勢いのこと。

数字——ここでは、筆者が出産直後に産院から示された授乳量
の目安の数値をさしている。

〔問1〕⁽¹⁾ 現代人が現代芸術を、正しく批評したり評価したりする事は、

実に難かしい、殆ど不可能な業である。とあるが、Aの筆者が

「殆ど不可能な業である」と述べたのはなぜか。その理由として
最も適切なものを、次のうちから選べ。

A 芸術というものが広く一般的に普及されるようになったことにより、
その形を特定することが困難だと考えているから。

I 現代芸術というものは日々変化し続けるものであり、総論的に捉え
ることのできるものではないと考えているから。

ウ 現代の芸術は膨大な過去の蓄積を踏まえて評価されるものだが、そ
の全てを把握することはできないと考えているから。

エ 様々に形を変えて多様に存在している現代芸術を、小さな差異に注
目して評価するのは難しいと考えているから。

〔問2〕⁽²⁾ 鏡の前に立った人が、鏡の中の自分の姿を見て、鏡の後ろに行け

ば、あの姿に触れると考えている様なものである。とあるが、

この部分においてAの筆者が述べようとしていることの説明とし
て最も適切なものを、次のうちから選べ。

A 予測不可能な未来とは違い過去は固定されたものだということ。

I 未来予測は現在を過去に投影した上で行うのがよいということ。

ウ 物質的に閉ざされた現実から解放されることはないということ。

エ 明日の姿を現在や過去から推測することはできないということ。

〔問3〕⁽³⁾ 社会心理学が専門の山岸俊男は、信頼と安心はまったく別のものだと論じています。とあるが、ここでの「信頼」を具体的に示した例として最も適切なものを、次のうちから選べ。

- ア 必要なものだけを買ってくるように、買い物リストを渡す。
- イ 友達との約束に遅れないように、十分前に集合場所に着いた。
- ウ チーム力向上のために、監督が練習メニューを選手自身に考えさせる。
- エ 旅行に行く前に、インターネット等を使い綿密な下調べと計画をする。

〔問4〕⁽⁴⁾ 「ここから先は人を信じよう」という判断をしたほうが、合理的であるということができますとあるが、Bの筆者がこのように述べたのはなぜか。八十字以上、百字以内で説明しなさい。

〔問5〕 次の会話は、文章A、Bを読んだ後の国語の授業の様子である。先生と生徒の会話の中のX、Yにはそれぞれあてはまる表現を文章Aの語句を用いて、Xは十字以上、十五字以内で、Yは十字以上、二十字以内で書け。またZには生徒を示すア、イ、ウのいずれかを書け。

先生…Aの文章で、筆者が考える「可能性」という言葉をBの文章で使われている「不確実性」という言葉を使って説明してみましよう。なお、文章Aの二重傍線部の部分はそれを考える上でヒントになります。よく考えてみてください。話し合ってから文章A、Bを整理した上で、各班で解答を書いてみましょう。時間になったら発表してもらいます。

生徒ア…まず、二重傍線部の意味について考えてみようよ。

生徒イ…そうだね。「消極的な意味での可能」というのはどう説明できるかな。

生徒ウ…「X」という程度の意味しか持たない『可能』というのはどうかな。

生徒エ…いいね。じゃあ「積極的な意味」は「消極的な意味での可能」と対比させればよいから…。

生徒ア…「Y」といった意味を無意識に付加している『可能』といえるかな。

生徒エ…なるほど。そうすると二重傍線部は「世間一般の人は、本来はX」という程度の意味しか持たない『可能』という言葉に、Yといった意味を無意識に付加しているということ。」といえるね。

生徒ア…文章Aの筆者はどちらを重視しているか、注意しないといけないね。

生徒イ…「不確実性」という言葉で説明するところかな。「不確実性」という言葉をちゃんと理解するところからはじめた方がよさそうだね。

生徒ウ…文章Bには「『不確実性』に開かれているか、閉じているか」とあるよ。これって、さっきの「可能性」の対比の構造に似ている気がするな。

生徒ア…そろそろ時間だから、それぞれで答えを書いてみようよ。（しばらくして）

生徒ウ…それぞれが書いたものを発表してみよう。

生徒ア…私は「可能性とは、自分の想定外のことが起こるかも知れない」という『不確実性』を否定した上で、将来の考えられる姿を指し示す言葉である。」と書いたよ。

生徒イ…私は「可能性とは、常に自分の想定外のことが起こるかも知れない」という『不確実性』を受け入れて、未来において多くの選択肢や状態があり得ることを指し示す言葉である。」と書いたよ。

生徒ウ…私は「可能性とは、想定外のことが起こりうるかも知れない」という『不確実性』をふまえて、これから起こるべき出来事をできるだけたくさん想定した上でその中から未来について言及しようとする言葉である。」と書いたよ。

生徒エ…みんなすごいな。私はまだ書いていないよ。でも最も適切に、Aの筆者が考える「可能性」という言葉をBの文章で使われている「不確実性」という言葉を使って説明できているのはZさんだと思う。先生にも聞いてみよう。

先生…どれどれ。みんなよく話し合ってから考えましたね。中でもZさんの答えがいいですね。

〔問6〕文章A、Bについて述べたものとして最も適切なものを、次のア～オから選べ。

ア 文章Aでは「ベルグソン」、文章Bでは「山岸俊男」というように、他者の意見や論考、文章を参考にしたり引用したりして、自身の論の土台や補強としている。

イ 文章Bは文章Aの考えを論の基軸に据えながら、「安心」「信頼」という二項対立を提示した上で、他者との付き合い方や評価の仕方を提案している。

ウ 文章Bにおける「山岸俊男」の引用は、文章Aにおける「シェクスピア」の例のように、筆者の意見の反証として論を構成する役割を果たしている。

エ 文章Aでは、空白の行を作ることの意味段落が変わったことを明確に示しているが、文章Bも同様に空白の行によって意味段落を明示しようとしている。

オ 文章Aでは、はじめに筆者の結論を述べた上で本文を展開し、末尾でもう一度結論を言い直す形式で論を進めているが、文章Bも同様の文構造を用いている。

次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。（*印の付いている言葉には、本文のあとに〔注〕がある。）

景樹は「しらべ」を重んじた。⁽¹⁾「歌はことわるものにあらず、しらぶるものなり」という発言をしきりと繰り返している。

「しらべ」には、「祈り」「境界」「演技」「連動する言葉」という要素がすべて含まれている。

たえだえに松の葉白くなりけりこの夕時雨みぞれなるらし

雲の題で詠んだ歌である。ときれときれに松の葉が白くなった。ああそれはこの夕方の時雨が、雲だったからなのだなあ、と気づいたというのである。⁽²⁾のちに景樹はこれをこう改作した。

I しぐるるはみぞれなるらしこの夕べ松の葉白くなりけるかな

（桂園一枝・四〇三）

（時雨かと思つたが、雲だったらしい。この夕暮れの中、松の葉が白くなったよ）

そしてこちらを『桂園一枝』に収めている。そして自ら一首を「雅調」と自負している。上下句をひっくり返して少し手を入れたくらいにも見えるが、二首はどう違うだろうか。

最初に詠んだ「たえだえに」は、まず上句で風景が描写される。おや、という発見が語られる。読者にとっては謎が示されるといってもよい。下句では、その理由が示される。たんなる冬の初めの時雨かと思つてしたが、雪まじりの雲だったのだなあ、と。「夕」の語からは、ほの暗い中で浮かび上がった白さであったことも察せられる。ただし、この下句

は名詞が連続していて、少し窮屈である。原因を駆け足で解き明かした、という説明感が出てしまう。謎めいた状況を発見し、やがてその訳に気づく、という言葉の運びは、実際の意識の流れに即しているわけだから、むしろ実感・実景を表現せよという景樹の主張に適合しているともいえそうである。しかし、事はそう単純ではない。窮屈な言葉の配置が、かえって人間の思考回路をなぞっている印象をもたらしかねない。意識的な人の仕事を浮き出させてしまうのである。

一方「しぐるるは」と改訂してどうなったか。まず初二句で判断の結果が語られる。そうして三句以下で、その判断を導いた状況が描写される。原作の上下を転倒させたわけだが、たんに強調するためだけの倒置法ではない。第三句以下がずいぶんゆったりしてきていて、雲だと思つた理由を示しただけではなくなる。もつと膨らみが出てくる。夕闇の中、白さを浮かび上がらせる松の木の前にたたずむ作者を感じさせるのである。のみならず、松は天候を含めその場の時空を焦点化した存在に他ならないから、作者の前に広がる風景をもじわりと想像させていく。つまり読み手は、まず初二句の謎めいた推定におやと思ひ、その疑問に促されて松の木の存在へと導かれるが、それが知的な了解で終わらずに、眼前の広がりのある風景に出会って受け止められ、風景が広がるとともにそこに溶け込んでいく感覚を味わうことになる。

この溶け込むような感覚が、「しらべ」の核心にあるのだと思う。溶け込むとは、対象と主体が密接に連動することと言い換えることができる。言語芸術である和歌に即していえば、我と言葉とが同調し連動する感覚といえるだろう。「しらべ」とは本来音楽の調子のことである。音楽を聴いていて、あるいは演奏したり唄ったりして、音調が身体と同調し連動してくる、あの感覚を比喩的に転用しているのだろう。

言葉と主体が連動し、溶け込むような感覚を示す和歌は、景樹の和歌に数多く見られる。「うづみ火の」（四三〇）などはその典型である。埋

み火のぬくもりを感じ取っているからこそ、雪景色の白鳥の山の冴えた白さが際立つのだが、洗われたような気分とともにやがてその距離は消えゆき、白鳥の山に吸い込まれていく。景樹の代表作などとされるのも、理由のないことではない。このような「しらべ」につながる連動の感覚を、景樹自身が自負していたと思われる『講義』でも取り上げられた歌で確かめてみよう。

風前夏草

川岸の根白高萱風吹けば波さへ寄せて涼しきものを

(桂園一枝・一八三)

(川岸の根の白い高萱に風が吹くと、波までが寄せて涼しいというのだからなあ)

『万葉集』の三四九七番歌に見える「根白高萱」という語句を導入している。『講義』によれば、当初第五句は「涼しかりけり」であったという。それでもよいのだが、「ものを」と言葉を残した、つまり余韻を持たせた述べている。根白高萱を吹く風の音だけでも涼しいのに、風が立たた波までが寄せてきていっそう涼しい、ということらしい。聴覚・視覚・皮膚感覚を動員しつつ、夏の中に見いだされた秋へと主体を浸透させていく、そのために「ものを」と余韻のある終え方をしているということなのだろう。川岸の根白高萱という特異な素材に刺激された主体が、やがて季節の奥へと溶け込んでいくのである。おそらく景樹が高く評価していた凡河内躬恒の歌、

住の江の松を秋風吹くからに声うちそふる沖つ白波

(古今集・賀・三六〇)

(住の江の松を秋風が吹くやいなや、声を揃えて寄せてくる沖

の白波よ

と同様の歌境を求めたのだらうと想像される。

彼はこのように言葉を練り上げ、多層的に連携するような工夫を行い、しかもそれを自負するところがあつた。

歳暮

Ⅱ 年の緒も限りなればや白玉の霰乱れて物ぞ悲しき

(桂園一枝・四三九)

(一年という緒も限界を迎えようとしているからか、白玉のとき霰が乱れ降り、心乱れて悲しい)

「大人自得の歌」(先生が満足している歌)だったという証言が残されている。「緒」が貫くのが「白玉」であり、その緒が絶えれば、「霰」の降るように散り「乱れ」、心「乱れ」て悲しい。普通にいつても、かなりうるさいくらいの縁語仕立てである。まして「実景実情」を説いたとされる景樹にふさわしくないようにも思われる。窪田空穂は「この歌には、彼としては第一になくてはならない実物実情の見るべきものがない」と手厳しく評している。だがむしろ、こういう縁語を駆使するような表現に彼の本領の一端があつたと考えべきだろう。霰の乱れ降る情景が核心にあることが見逃せない。歳末に悲しみを催されているだけではなく、歳暮と悲しみの間に、霰乱れる風景が抜き差しならない結節点となっていて、そこへと事柄と心情が集約される構造となっている。心情表現にすべてが収斂するのではないのである。言葉の連動が無意識の領域を作り上げ、そこに理想が託される。ここでも、主体は言葉の表す景に溶け込んでいくといつてよいだろう。言葉の緊密なつながりに、作者が連動していくのである。主体が景に溶け込んでいくよう言葉を構

えていくという点で、実感・実情の歌も、雅調の歌も、けっして別物ではないのである。

（渡部泰明「和歌史　なぜ千年を越えて続いたか」による）

〔注〕景樹——江戸時代の歌人である香川景樹のこと。

桂園一枝——江戸時代に成立した、香川景樹自選による歌集。

上下句——五、七、五、七、七の五句で構成される和歌の五、七、五を上句といい、後半の七、七を下句という。ここでは上句と下句を合わせて上下句と表現している。

「うづみ火の」——うづみ火の外に心はなけれども向かへば見ゆる白鳥の山（桂園一枝・四三〇）

（埋み火（囲炉裏の灰に埋めた炭火）に心奪われていたが、ふと見ると、白鳥の山に向かい合っていた）

『講義』——『桂園一枝講義』のこと。『桂園一枝』について香川景樹自身が行った講釈を聞き書きした書物。

根白高萱——水によって根元が白くなった背の高い草。

凡河内躬恒——平安時代の歌人。

緒——糸や紐などの細長いもの。また、長く続くもの。

白玉——白色の美しい玉。真珠の古名。

縁語——意味の上で関連のある語を二つ以上用いて表現効果を高める和歌の技法。

窪田空穂——歌人。国文学者。

収斂——ひろがっているものを一点に集結すること。

〔問1〕⁽¹⁾ 歌はことわるものにあらず、しらぶるものなりとあるが、ここ
でいう「歌はことわるものにあらず」の説明として最も適切な
は、次のうちではどれか。

ア 歌は抽象的に解釈したり創作したりするものではないということ。

イ 歌は論理的に理解したり表現したりするものではないということ。

ウ 歌は読者の介入を拒否したり固辞したりするものではないということ。

エ 歌は作者の存在をほかしたり消したりするものではないということ。

〔問2〕⁽²⁾ のちに景樹はこれをこう改作した。とあるが、改作後のⅠの歌
について筆者が本文中で説明したものととして最も適切なのは、次
のうちではどれか。

ア 三句以下にゆとりをもたせることで余情を生み出し、読者が作者の
体験した風景をなぞるように経験できるものとなっている。

イ 初二句で白い雲を提示したうえで三句以下に松の葉の緑を登場させ
ることで、読者の視点の誘導に成功した表現となっている。

ウ 初二句で謎めいた状況を述べて読者の興味を引きつける構造となっ
ており、情景と読者を結び付けようとするものとなっている。

エ 三句以下に名詞が少なくなっており、松に焦点を絞った作者の視線
から和歌の世界を読者に想像させるものとなっている。

〔問3〕 までとあるが、これと同じ意味・用法のものを、次の各文の――

を付けた「まで」のうちから一つ選べ。

ア 傘を忘れたから、雨がやむまで待った。

イ 宿題を終え、部屋の片付けまでやった。

ウ 今日は急いでいるので、話はここまでだ。

エ 不明な点がある方は、係の者までお伝えください。

〔問4〕 まして「実景実情」を説いたとされる景樹にふさわしくないようにも思われる。とあるが、Ⅱの歌に対する筆者の評価を説明した

たものとして最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア 主体の所在を言葉の緊密な連携に内包させることによって、実感を排除した作者の理想を描き得ている。

イ 悲しみとは関連の薄い言葉を連携させることによって、来るべき新年への喜びを無自覚的に想起させ得ている。

ウ 年末の風景描写を中心に据えながらも巧みに言葉を連携させることによって、風景と心情を融合し得ている。

エ 霰の降る情景に年末の悲しさを技巧的に集約させることによって、風景そのものをより鮮明に表現し得ている。

〔問5〕 本文中の「しらべ」の説明として適当でないものを次のうちから一つ選べ。

ア 余韻のある表現に触れることによって、読者自身が和歌の創り出す世界に居合わせるような感覚。

イ 言葉の響き合いにより、言葉そのもののもつ意味を越える領域にまで主体が没入するような感覚。

ウ 言葉が生み出す景色の内部に主体が包みこまれ、実感として歌を味わっていくような感覚。

エ 言葉の意味だけを味わうのではなく、音韻やリズムを通して主体が和歌世界に共鳴するような感覚。